

ラテン化新文字は山東方言か

中村雅之

1. ラテン化新文字とは

ラテン化新文字は中国語のローマ字表記法として1920年代末にソ連にいた瞿秋白(1889~1935)が考案したもので、1930年に初めて冊子にまとめられた。その後、呉玉章や蕭三らによって研究が重ねられ、修正を経て、1932年にラテン化の原則や正書法の説明、さらに音節表などをまとめた冊子がモスクワで出版された。これらの資料は橋本萬太郎編『文字と言語 研究資料3 ラテン化新文字 - 資料集 - 』(1978)としてまとめられている。

ソ連在住の中国共産党員たちによって始められたこのラテン化運動は、まずウラジオストックやハバロフスクの中国人労働者の間で進められ、その後まもなく中国国内に伝わって、延安などの共産党支配地域でも広まった。

1958年に現行の拼音字母(=ピンイン)が施行されるまで、ラテン化新文字は日本の中国語教育などにも利用された。そのシステムから見ても、ピンインの前段階と称して差し支えないものである。

2. 基礎方言問題

倉石武四郎『漢字の運命』(岩波新書、1966年改版)の134頁には、ラテン化新文字が「山東語に即した構成である」と明言されている。そこにはまた「ラテン化が山東方言を標準としたことはたこでも動かぬ事実である」という黎錦熙のことも引用されており、『漢字の運命』の初版が書かれた1952年当時において、ラテン化新文字が山東方言に基づくという見解は、すでにかなり広まっていたようである。

しかし黎錦熙は国語統一籌備会のメンバーとして、北京音を標準とすべしと強く主張した人であるから、彼がラテン化新文字を「山東方言」だと称する時、純粹に言語学的な根拠に基づいたというより、「北京語にあらざる一方言」という揶揄したニュアンスが含まれている可能性のあることは考慮しておくべきであろう。

とはいえ、この「ラテン化新文字=山東方言」説の背景に一定の言語事実が存在することもまた間違いない。それはいわゆる尖団の区別である。「津」と「今」は現行のピンインではともに「jin」で区別がないが、ラテン化新文字では「津zin」と「今gin」であり、明瞭に区別される。つまり、尖音を「z/c/s」、団音を「g/k/x」で表す。これが山東省の一部の方言の特徴と一致するわけである。

さらにまた、倉石の見解によれば、ラテン化新文字は東部シベリアの中国労働者を文盲から救うために始まったものであり、その労働者は中国東北部から国境を越えてきたものが多い。したがってシベリアの労働者の言語は当然東北の方言に従い、また当然山東語の

系統に属する、ということになる。(『漢字の運命』128頁)

しかしこの倉石の論は、残念ながら、はなはだ心許ない。まやかしの三段論法と言うべきである。東部シベリアの中国労働者を救うための文字に、山東方言を用いるという道理があるのか。中国東北部の言語では一般に尖団の区別を持たない。その住民が東部シベリアの中国労働者になったとすれば、当然その言語にも尖団の区別はないはずである。なぜ彼らの「文盲を救う」ために、わざわざ別の方言を用いる必要があるのか。冷静に考えてみれば、ラテン化新文字の作成に際して、取り立てて山東方言を選ぶという何らの理由も見当たらないであろうし、実際、ラテン化新文字の作成に関わった誰一人として、山東方言との関わりを述べていないのである。

周有光『漢字改革概論』(文字改革出版社、1979年第3版)が、ラテン化新文字に北京語と異なる発音が出てくるのは、北方で通用した音を含んでいるからであって、一部の人が山東方言であるというのは決して事実ではない、と指摘しているのは穏当な見解であろう。(周氏の書未見。いま藤井(宮西)久美子『近現代中国における言語政策』92頁、三元社、2003年、による)

3. 表記の特徴からの検討

瞿秋白の原案の表記は、後に修正されたものとはかなり異なっている。瞿秋白『中国拉丁化的字母』(1930年発行)に見える表記と、後の研究と修正を受けてまとめられた蕭三編集『拉丁化中国文字拼音和写法的参考書』(1932年発行)の表記について、基礎方言に関わる部分の相違点を見ると、以下の通りである。(ともに橋本1978による)

	瞿秋白(1930)	蕭三(1932)
「得」	de	de ~ dei
「北」	be	bei
「百」	be	bai
「黒」	he	xei
「二」	re	r
「敦/東」	dun/don	dun/dung

以上の例を見ただけでも、当初瞿秋白が表記しようとしたものが北京語でないばかりか、北方方言でさえなかった可能性の高いことがわかる。瞿秋白が江蘇省常州の出身であること、また彼が声調を(入声を含む)五声と表現していることなどから、彼の表記は事実上、(広義の)南京官話を基礎として考案されたものと考えられるのである。上の ~ は全て入声字であるが、19世紀半ばに英国人Edkinsが表記した官話音とほぼ等しい。違いはEdkinsが短い声調(=入声)を「-h」で表記したのに対して、瞿秋白はそれを用いなかったというだけである。についてもEdkinsの「rī」とそっくりである。

も(広義の)南京官話に基づいた間接的な証拠になるのではないかと考えられる。韻

尾の「-n」と「-ng」は瞿秋白の表記では明白ではない。凡例では「-ng」にあたるものを「-ñ」と表記することになっている。つまり「但是danshe」に対して「当時dañshe」ということであるが、実際の文章では全く徹底されていない。しかも、「動don」「工gon」のように「-on」の場合には、その韻尾が「-ng」であることは明白なので、「-oñ」とせず「-on」で済ませるといっているのである。このような「-n」と「-ng」の区別に関する鈍感さはもちろん瞿秋白が江蘇省出身であることに起因するであろうが、同時に、これらの表記が決して北方方言の観察によって行われたものでないことを示している。

以上を勘案するに、ラテン化新文字が仮に倉石が述べたように「東部シベリアの中国労働者を文盲から救うために始まった」のだとしても、そのために彼らの言語に合わせた表記を作るという発想は、少なくとも瞿秋白にはなかったと言える。いわんや、その表記に山東方言が入り込む余地などは微塵もなかったのである。

これに対して、修正後の表記はかなり北方的になっている。ここにはラテン化にあたっての13箇条の原則が記されているが、その第9条に、ソ連の中国労働者は大多数が中国北部の出身であるから、ラテン化新文字も北方語によることを明記している。

4. 尖団の区別について

ラテン化新文字に「zi-/ci-/si-」と「gi-/ki-/hi-」(のち「hi-」は「xi-」に修正)の区別があることはすでに述べたが、実は団音の「gi-/ki-/hi-」は倉石が考えていたような[kɪ-/kʰi-/hi-]を表すのではない。瞿秋白(1930)は、「g/k/h」が母音「a/o/e/u」の前では「硬い」音であり、「i/y」の前では「軟らかい」音であると明記している。しかもそのロシア語訳の部分では「軟らかい音」に対してロシア文字「г, к, х」を充てて説明しているから、ラテン化新文字の「gi-/ki-/hi-」が現在のピンインの「ji-/qi-/xi」で表記されている音であることは明白である。そして同じ説明が蕭三(1932)にも踏襲されている。この意味でも、ラテン化新文字を山東方言と結びつける積極的な根拠はないことになる。

前節で、瞿秋白の表記が南京官話によったのではないかと述べたが、団音は当時の南京官話でもほぼ舌面音化していたと思われる。19世紀半ばのEdkinsの表記ですでにその傾向は表れており、現在の南京および江蘇一帯でも完全に舌面音で発音される。ただし、瞿秋白が舌面音の表記に「gi-/ki-/hi-」を用いたのは、彼が少年時代を過ごした江蘇常州の老先生たちの中に団音を「硬い音」で発音する人がいたということなのかも知れない。

舌面音を「gi-/ki-/hi-」で表記するという瞿秋白のアイデアは、その後30年近く踏襲された。1957年11月に国务院で現行のピンインが採択される直前まで用いられたのである。1956年11月に「漢語拼音方案草案」の「修正第一式」(「gi-/ki-/hi-」)が審訂委員会を通り、正式採用のはずであったが、土壇場で現行の「ji-/qi-/xi-」に代えられた。ここに至ってやっと、中国のローマ字表記は瞿秋白というシッポを切り捨てたのである。